

介護者一息つく場を

石和温泉病院有志が企画

介護者に一息つける場を提供しようと、石和温泉病院（笛吹市）の専門職有志は、「医療・介護のお悩み相談所 BREAK TIME（ぶれいくたいむ）」と名付けた会を開いている。介護に役立つ情報を提供し、介護者同士で胸の内を語り合う時間を設けていて、現在は病院外に出向き、利用者以外も対象として活動する。入院日数が短くなり在宅で療養する人が増える中、専門職のノウハウを生かし、地域の中で相談できずにいる介護者をサポートしている。

6月下旬に甲州市内で開かれた「ぶれいくたいむ」。誰もが発症する可能性のある認知症について、同病院の認知症看護認定看護師・高野順子さんは認知症の症状や早期発見のポイント、認知症の人への正しい対応などを説明し、「大切にしたいのは認知症の人の感情」と呼び掛けた。

認知症講座に続き、参加者はグループに分かれて語り合う。専門職が進行役になり話を進める中、ストレスを抱える介護者に対し、専門職が自分の時間を持つこと、「介護者が自分の役に立つ必要」と経験者がアドバイス。参加者は家族を施設に入れた際の複雑な心境、子どもが病気で入院したショックなどを語り、中には「自分が認知症ではないか不安」と打ち明ける人もいた。

多職種関わる

ぶれいくたいむは同病院の患者の家族を支援しようと4年前、専門職有志が立ち上げた。同病院の看護師や管理栄養士、社会福祉士、ケアマネジャーをはじめ、理学療法士や作業療法士、薬剤師など多職種が関わる。

隔月に1回、病院内で開き、各専門職が自宅での介護に役立つ情報や技術について講演。これまでに栄養管理や排せつケア、嚥下、腰痛予防などをテーマにしてきた。講演後は、専門職も交えて介



地域の介護者を支援するため、専門職有志が開いた「ぶれいくたいむ」。介護に役立つ情報を提供し、質問を受け付けた

護者同士で語り合っている。回を重ねるうちに、「病院の利用者以外にも、介護に悩みながら話す機会がない人に支援を届けたいと思うようになった」と代表で理学療法士の原田智史さん。昨年12月、病院利用者以外も対象に初めて会を開催し、病院外で半年に1回開いていくことを決めた。

病院外では2回目となる6月の会に参加した男性(66)＝甲州市＝は母親を介護していて、「1人の人生をどんな形で終わらせてあがられるかを考えたとき、こういった勉強の場が必要」と感想を話す。

選択肢増えて

医療と介護の多職種が集まり、話を聞く場は少ないとから、原田さんは「自分たちの知識や技術が、少しでも地域の人の役に立てば」と考える。介護経験者の存在も大きく、「経験者の話は悩んでいる人の胸にすっと入る。専門職にとってもいい勉強」と感じている。

県外から子どもが通つて親を介護する、家事に不慣れな夫が妻の世話をするなど、介護を担う家族の形態は変わり、介護者の負担は大きい。高野さんは「ここに相談すれば必要な支援につながると思つてもらえるように、ネットワークを広げたい」と言う。原田さんは「地域の中にいろいろな会があり、介護者の選択肢が増えるといい」と介護者が本音を話せる場が増えることを望んでいる。

ぶれいくたいむに関する問い合わせは、石和温泉病院、電話055(263)0111(原田さん)。